

糖尿病療養指導者としての自分を見つめる—ワークショップ体験を通して

第3回実践的糖尿病教育研究会
(富山, 2003年5月24日)

杉本 正毅 松本 承子

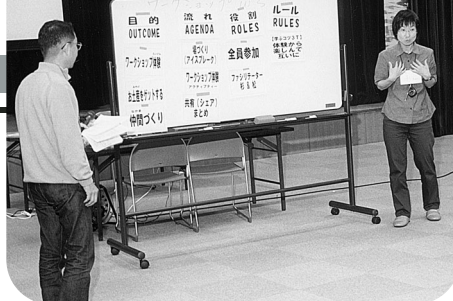
私たちのワークの目的は「ワークショップ(以後WS)体験」を通して、参加者が今後、ファシリテーターとして教育現場で応用していくヒントをつかんでもらうことでした。

私たちはこれまでの個人的なWS体験から「糖尿病教育にはWSという学びのスタイルが欠かせない」と考えるようになっていました。今回、このようなWSを企画したのも“WSという学びの場の持つ力を観念でなく、体験として参加者に実感して欲しい”という思いからでした。

まずはじめに今回のWSの意図や目的を簡潔に説明し、続いて「WS」の3つの特徴である「参加」「体験」「相互作用」について説明しました。WSは知識偏重教育に反発する概念として生まれた学びのスタイルであること、そこで「受身でなく、主体的に参加してほしいこと」「アタマだけでなく、からだと心をまるごと総動員して感じてほしいこと」、「心からの分かち合いを通じて、参加者同士が双方向的に学んでほしいこと」を伝えました。

次にアラニス・モリセットの「ユートピア」¹⁾という曲を流しながら、その歌詞を朗読しました。歌詞の中には「私たちは輪になって座り、会話に夢中になり、罪悪感もウソもなく、恐怖も仲違いも裁きもなく…、私たちは今ここに座り、呼応し、うち解け、受け入れ、認め、許し…、これがユートピア(ワークショップ)、これが私の理想郷」と歌われています。この「音楽」や「詩の朗読」などを使った演出は、感性に訴える手段を使うことによって、アタマだけではなく、全身全霊で感じるというWSの醍醐味を伝えるために行いました。

次に2人ずつペアになって「子ども時代の自分の役割、特にグループの中での自分の役割」について振り返ってもらい、ペアでそれをシェアしました。さらに続いて「医療人としての自分を変えたもっとも大きな出会い」について振り返り、同様にペアでシェアして



もらいました。これらのワークの間にもBGMとして、エンヤや坂本龍一の曲を流しました。そして最後に4人ずつのグループになって、今回のWS全体を通して気づいたことを互いにシェアしてもらい、数人の方に感想を述べてもらいました。そして最後に私たちがWSの今日的な意義についてのまとめをして終了しました。WSは、このような「体験」→「振り返り」→「分かち合い」を繰り返しながら進めていきます。

私たち2人は約1カ月前から今回の計画を練り始めたわけですが、一番の課題は「わずか1時間という時間制限の中で、どうやってWSという場のもつ無限の可能性を実感してもらえるのだろうか?」という問題でした。1カ月間メールでのやり取りや2回のミーティングを通じて、議論を重ねて本番に臨みました。少しでもWSの世界を垣間見ることができた方がおられたのなら、望外の喜びです。WSは「人と人との関係の豊かさ」や「ありのままの自分の感情に触れ、それを表現する」など、糖尿病患者教育においてとても大切な部分を扱っています。これは患者相互のグループワークや患者会活動などに応用が可能です。今後さまざまな教育の現場で応用されることを期待しています。M

ずぎもと まさたけ
行田総合病院 内科
(〒361-0056 行田市持田376)
まつもと しょうこ
荒川区保健所 保健サービス課
(〒116-0002 荒川区荒川1-53-20)